

幕末期プロテスタント受洗者の研究

——佐賀藩士・綾部幸熙の事例にみる——

中島一仁

はじめに

戦国期のカトリック伝来から三〇〇年近くの時を経て、開国後の江戸幕末期に長崎、神奈川、函館などの開港地でプロテスタントを中心とした宣教師らによって日本へ第二のキリスト教布教が図られた。明治六年の高札撤去¹黙許までキリスト教信仰は禁制であったが、わずかながら洗礼を受けた日本人がいた。最初は慶応元年、神奈川で鍼灸医・矢野隆山がバラから、二番目は同二年、長崎で熊本藩士・荘村省三（助右衛門、彝臣²）がウイリアムズから、三番目は同年、本稿で取り上げる佐賀藩親類・村田政矩（若狭）と同藩士・綾部幸熙（三左衛門）³の兄弟が長崎でフルベッキから受洗したとされており、明治元年になると粟津高明や清水宮内、鈴木貫一などといった者たちが知られている。

彼ら最初期の日本人プロテスタント信者についての研究は徐々に積み重ねられてきた⁴。村田と綾部についても、初めて日本のプロテスタント史を体系的にまとめた『日本基督教会歴史』（一八九七年）以降、さまざまなキリスト教史概説書に取り上げられてきた⁵。また、村田・綾部に授洗した米国人宣教師フルベッキの研究の側からは、村瀬寿代氏や佐々木晃氏らがフルベッキと村田らとの関わりについて言及されている⁶。

だが、概説書の多くは、村田が安政年間に長崎で外国語聖書を拾得したのをきっかけにキリスト教に興味を抱き、家臣や綾部を通じて聖書研究を進めて受洗に至った経緯を簡略に記すだけに終わっているうえに、ほとんどの記述は史料的な裏付けに乏しい。また、村瀬氏らの研究は、目的からすれば当然だが、史料の多くをフルベッキ書簡によっていて、日本国内の史料が十分に使われておらず、村田・綾部の行実が明らかにされているわけではない。

兄弟の中でも綾部は、概説書などで村田の弟として「添え物」的に書かれているに過ぎず、藩士としての実像はおろか生没年や幸熙という諱さえ明らかにされてこなかった。氏名を「村田綾部」としている書籍もあるほどだ⁷。

本稿では、兄村田政矩とともに受洗した我が国最初期のプロテスタント信者でありながら、その生涯がほとんど知られていなかった綾部幸熙の受洗までの半生を実証的に描き、キリスト教禁制下になぜ彼らが洗礼を受けるに至ったのか、その経緯をたどってみたい。

一、綾部幸熙の経歴

(一) 家族・縁戚関係

綾部幸熙は、天保五年一二月に佐賀藩家老・深堀鍋島家に生まれた⁶⁾。父鍋島茂辰の一〇男(庶子)で、幼名は鹿喜代、鹿之助。村田政矩は二〇歳違いの異母兄に当たる。

深堀鍋島家は現在の長崎市深堀地域を中心に六〇〇〇石の知行を持ち、幕府から長崎警備の任務を課された佐賀藩のなかでも、最前線でその役割を負っていた。茂辰は、文化五年にオランダ船を装ったイギリス軍艦が長崎港に侵入し、オランダ商館員を人質にとつてイギリス国旗を掲げたフエートン号事件時の当主であった。時の長崎奉行が切腹し、佐賀藩主が逼塞を命じられた重大事件として知られるが、茂辰も蟄居の処罰を受けている。

茂辰の長男で政矩、幸熙の兄である茂勲(家督せずに早世)は藩主鍋島斉直の娘町を娶っている。政矩が養子に入った村田家(知行高一万七〇〇石)は実は竜造寺氏嫡流の子孫で、藩主家「親類」の資格を持つ四家のうちのひとつであった。このように幸熙は藩主家とも縁戚関係を持ち、兄たちは藩内の最上層に位置していた。

幸熙は深堀鍋島家から綾部家に婿養子に入った。「藤原姓綾部氏系図」⁷⁾の幸熙の項には次のように記されており、亡くなるまでの概略が判明する。

深堀左馬助殿弟、実ハ同人祖父孫六郎殿十男、幸教男子無之ニ付、養テ嗣トス、息女津義工嫁娶、其後津義女病死ニヨリ、四女幾智ニ嫁娶

慶応四年戊辰正月四日、直大公御上京別段御供、三月命セラレ北陸道進発、夫ヨリ出羽二行 明治二年一月四日凱陣 同四月切米拾石加増 同四年五月ヨリ東京ニ於テ奉職、工部省造船少師ヨリ陸軍九等出仕ニ至ル 同十一年辞職 同十三年大蔵六等属ニ被任 同十六年辞職
明治卅二年三月十七日卒ス 清岸院諦誓熙道白心居士 青山共葬墓地ニ葬ル

「深堀左馬助殿」とは茂勲の長男茂精(孫六郎)のことである。茂精は父茂勲が早世したために祖父茂辰の養子となっており、幸熙にとり甥茂精は義兄に当たる。養父幸教(二郎左衛門、文化一〇年生まれ)に男子がなかったことから、幸教の娘ツギ(天保七年生まれ)の婿養子に入った。ツギが安政六年に死去した後は、その妹キチ(弘化四年生まれ、のちヨシ)を後妻に迎えた。享年は六六であった。

幕末期の「大小配分石高帳」⁸⁾によると、綾部家は、

一物成米百八拾三石五斗	綾部一郎左衛門
内	
地米百六拾五石式斗四升五合	神崎郡詫田郷 詫田上ヶ地村
同拾八石式斗五升五合	同郡中郷 田道ヶ里

幸熙 初鹿之助、後三左衛門

とされている。

一定の年貢率（幕末期は原則的に四割）を設定して物成高から知行高を逆算する佐賀藩独特の知行高表示により計算すると知行高四五八・七五石となり、藩内では上位一〇%ほどの上層に入る。親類―親類同格―家老―着座―侍（平侍）―手明鐘―徒士―足輕という藩家中の階層の中では「侍」の家格であった。

幸熙が養子に入った年や家督を継いだ年は明らかではない。弘化三年に藩に提出された「綾部氏系図」¹¹には幸熙の記載がなく、嘉永四年に養父幸教に実子幸保が生まれていることから、養子になったのはこの間のことと考えられる。また、「慶応三丁卯年夏五月吉辰 惣番秩禄」で当主は幸教とある一方で、明治二年頃作成の「旧佐賀県士族禄高調帳二」で幸熙と同人とみられる「三衛」が当主として出ており、この間に家督を継いだと考えられる。

（二）修学期

幸熙一七歳の嘉永三年、佐賀藩では「文武課業法」が布達された。二五歳までに身分に応じた規定のレベルの課業を修了できない者が役方に就くことを許さなかったり、減禄を課したりする厳しい制度であった。¹² 着座以下、侍三〇石までは文武両方が必修で、文学は「出精昇達」を経て「独看」まで、武芸は剣または槍の「目録」を経て「免許」にまで到達することが必要とされた。

文学について詳しくみると、藩校弘道館での素読、独り読の後、「小学」「孟子」「論語」「大学」に加え和漢の歴史の講義を受け、相応の成績を得た者が出精昇達と認定され、次に「詩経」「書経」「中庸」「易経」と和漢の歴

史の講義を受け、試験に合格した者が独看と認められた。いずれも弘道館での良好な成績を求められるものだった。

綾部

物百八十三石五 倉^マメン 四十四 ○一郎左衛門 播
文 二十三 ○鹿之助 片田江^江

右は、安政三年時点での佐賀藩士の名簿に記された、父幸教と幸熙の文武課業法における到達度の記載である。家の物成高に続いて、「文トク」（文学独看）、「槍メン」（槍免許）などの達成段階、安政三年時点での年齢、当主や嫡子の名、所属大組、住所が記されている。名前の前には、文武とも課業を達成していれば◎（課業済）、片方だけなら○（半課業済）の印が書き込まれている。¹³

幸熙は二三歳の時点で文学の半課業を達成している。生馬寛信氏の「佐賀藩『文武課業法』における課業達成状況・藩士名簿『早引』による」¹⁴は、「早引」の記載が更新された安政五年で規定の二五歳に達する者の文学独看達成者は九人にすぎず、非常に難しいことだった、としており、幸熙は漢学学習に相当優秀だったことがわかる。

（三）長崎での英学稽古

従来の研究で、村田の家来や幸熙が長崎で宣教師フルベッキに聖書そのほかを学んだことや、佐賀でキリスト教を学ぶ村田の疑問を解くために家来が両地を往復し、フルベッキから得た答えを村田に伝えていたことが明らかになっている。なぜ幸熙が長崎に行ったのかに関しては、村田がキリスト教を学ばせるために派遣したとされてきた。¹⁵ しかし、次の史料を見る

と、それは誤りであると言わざるを得ない。

此通

英学之儀、当時長崎表ニも稽古方十分出来候由、就而者先般、馬渡八郎始三人者被差越置候得共、当今必用之学問筋ニ付而者、今又兩人程被相増、左ニ書載之者共為伝習、出崎被 仰付方ニ者有御座間敷哉

綾部三左衛門

嶋内藤吉弟 嶋内伍吉郎

右奉伺候

被遊御下候由ニ而、文久二年戊戌十月九日、御年寄鍋嶋市佑殿令牟田二右衛門江被相渡之⁽¹⁸⁾

文久二年一〇月、佐賀藩は英学を学ばせるため長崎に派遣していた藩士を二人増員した。新たに派遣されたのは、幸熙（二九歳）と嶋内藤吉の弟伍吉郎で、派遣理由は「当今必用之学問筋」を学ばせることであつた。この史料を収める「請御意」が藩の軍事行政部門である御備立方が編集したものであることを考え併せると、軍事上の要請で派遣されたことがうかがえる。

佐賀藩が初めて藩士に英学稽古を命じて長崎に派遣したのは、万延二（文久元）年二月である。⁽²⁰⁾ 秀島藤之助、中牟田倉之助、石丸虎五郎（安世）の三人が「海軍取調方助役」の肩書で赴いた。同年、三人は砲術、軍艦規則の研究も命じられた。翌二年五月には馬渡八郎（俊邁）と金丸知三郎が派遣された。次の第三次が幸熙らであつた。

これら稽古生はどのように学習をしたのであろうか。稽古当時の日記類

を基にした伝記⁽²¹⁾がある中牟田を例にみてみたい。中牟田は文久元年二月に長崎に赴いた後、幕府の海外派遣使節に参加すべく一〇月に佐賀に戻つた。参加準備のため江戸に行った後、上海派遣使節に加わるため再び文久二年二月に長崎入りし、出航の四月まで滞在しており、⁽²²⁾ 文久二年二月以降についても併せてたどつてみたい。

彼は文久元年二月、石丸、秀島とともに通詞三島末太郎に、同月、石丸とともにオランダ人フォーゲルに入門している。三月、英蘭対訳辞書の購入を藩に許された。同二年二月、三島から英語を、フルベッキから数学と英語を学ぶようになる。三月から英国人パーカーに数学を学んだ。

右のことから幸熙も、佐賀藩内の人脈を中心にさまざまな伝手を頼つて通詞や外国人と関係を作り、英語を中心とした英学を学んだものと推測される。

二、綾部幸熙の受洗

（一）フルベッキとの出会い

幸熙がキリスト教の洗礼を受ける上で最大の影響を与えたのがフルベッキである。彼は明治政府の「お雇い外国人」として、米欧への岩倉使節団の派遣を提案したり、大学制度の創設に携わつたり、法律顧問として法整備について助言したりしたことで知られる。ただし、元来は米国オランダ改革派教会の宣教師であり、安政六年の開国直後に夫人とともに長崎に上陸し、日本人との関係づくりに励んで布教の機会をうかがつていた。

このようなフルベッキを幸熙がどのようにして知ることになったのかを、フルベッキが米国ニューヨークの伝道本部に送つた書簡をもとにみて

みたい。

私が出した数通の手紙や報告書で、聖書の研究に取り組む五人の仲間たちの話があったと思う。これらの男性たちは、横浜^(ママ)(長崎の間遠いであろう、筆者注)から二日のところにある、日本でも最も開け、かつ勢いのある都市である日藩の城下町Sに住んでいた。…(略)：一八六二年秋には、彼らの一人である綾部がここへ来て、私といつも勤勉に聖書を読んで質問するようになり、私は彼の真面目さと心の実直さに心を打たれた。⁽²³⁾

幸熙のフルベッキ訪問が、英学稽古の命を受けた一八六二(文久二)年秋だと明記されている。「日藩の城下町S」とは肥前藩の佐賀であり、そこで幸熙を含め五人が聖書を勉強していたことが分かる。幸熙の性格をフルベッキは、勤勉、真面目、実直とほめている。では、「五人の仲間たち」とは誰か。どのような経緯で幸熙がフルベッキのもとを訪れるようになったのだろうか。(以下、引用文中の傍線は筆者による)

記録しておかなければならぬ最も重要で興味ある事実は、昨年、バイブルクラスを設けたことです。…(略)…昨年末までに四名の聖書研究者がありました。一週間に二、三時間、一定の時間に来ており、今もつづいて来ています。その一人は独りでやって来ましたが、これがわたしの最初の生徒でした。彼はほとんど「創世記」を読みおわり、「ヨハネによる福音書」をかなりよく読んでいます。もう一人の生徒

はこの春以来出席していましたが、ハシカのため隣の藩の彼の家に余儀なく帰り、その後秋になって、他に二人の人を伴って帰って来ました。これらの三人のものは、この港に英学研究の施設があるので藩主から派遣されて来たのです。

一週間に二度わたしの所に来て、「ヨハネによる福音書」を読んでおりましたが、なかなかよくできるようになりました。わたしは一年ばかり前に、その一人に聖書やその他の書籍を与えておったのですが、彼はここに来る以前にすでに漢訳の福音書を普通の知識ある日本人ならば読み得る程度で、読んでいたのです。なお、そうした方法で使徒行伝やパウロ書翰などを下読みして来ています。

彼等三人の外にむろん多少関係あるものですが、もう一人います。外国語は全然知らないけれど、その家庭で漢訳の聖書を読んでおり、私のバイブルクラスで他の生徒が学んでいるのを快く思っている者で、わたしも、まだ会ったことはありませんが、クラスの第五番目の生徒と認めたいと思います。

(一八六三年一月二四日付の「一八六二年年報」⁽²⁴⁾)

キリスト教禁制下に聖書を学ぶ日本人について記しているためか、この時期のフルベッキの書簡は人名がほとんど伏せられていて人物の特定が難しいが、次のように推定する。

「この春以来バイブルクラスに出席しハシカのために家に帰り、秋になって二人を伴って戻って来た人物」は、村田の家来である本野周蔵⁽²⁵⁾、「伴われて来た二人」のうちの一人は幸熙(もう一人は不明)。「一年ばかり前に聖書やその他の書籍を与えられていた人物」は本野、「第五番目の生徒」

は村田を指していると思われる。

本野は主君村田に願ひ、万延元年から断続的に長崎に遊学していることが、本野の四男が本野の手記などを基に編集した伝記⁽²⁶⁾で判明する。前述の中牟田の伝記には、本野が文久二年二月に中牟田らとフルベッキのもとに通うようになったことが記されている⁽²⁷⁾。引用した書簡は一八六三年一月二四日(文久二年一二月)付なので、約一年前に聖書や他の書籍を与えていたという記述とも合致する。本野の伝記には、本野が長崎で麻疹(はしか)にかかり、一時佐賀に戻つて静養したことが書かれている。また、「長崎略史」の年表には、文久二年二月の欄に「麻疹流行患者甚多し」とあり⁽²⁸⁾、本野が文久二年二月以降にはしかにかかつて一時的に帰郷し、長崎派遣が決まった幸熙を伴つて長崎に戻つたとすれば、書簡の記載内容と矛盾しない。

フルベッキと彼のもとを訪れた日本人らとの交流の実態を調べた村瀬氏の先行研究によると、はしかで家に帰つた後に二人を伴つて戻つてきた人物は幸熙、伴われてきた二人は本野と不明人物とされている⁽²⁹⁾。しかし、村瀬氏はじめ従来の論考は、文久二年一〇月の幸熙に対する英学稽古命令という重要なメルクマールを把握せずに行われており、フルベッキも「一八六二年秋」に幸熙と初めて会つたと明記している。本野がはしかにかつたことも分かっていることを考え併せると、村瀬氏の推定には無理があるように思われる。

ただし、筆者の仮説も本野がはしかにかつた時期に関しては問題がある。本野の伝記の記述では、罹患したのが文久三年一月前後と読め、さらには療養から長崎に戻つたのが七月とされているのだ⁽³⁰⁾。ただ、この伝記の年代に関しては矛盾を指摘する研究もあり、本野の記憶の誤りによる年代

の間違いもないとは言えないようだ。

「四名の聖書研究者」に「第五番目の生徒」である村田は含まれていないはずなので、本野、幸熙、本野と知り合いの氏名不明の人物に加え、もう一人いることになる。これは推定しようもないが、キリスト教の浸透を恐れ、偵察のためにフルベッキに近づいた真宗僧侶のことかもしれない。一八六八年八月一七日付フルベッキ書簡には、自身が教えを受けた僧侶の一人が破邪書といわれるキリスト教攻撃の書を著したと記している⁽³²⁾。

さて、文久二、三年は、生麦事件(同二年八月)によつて日英関係が険悪化して戦争の可能性さえ言われ、長崎にいる外国人の身に危険が及びかねない時でもあった。「六三年春、夜に私のところに来て、遠くぼつんと住んでいた私と家族に危害が及びそうになっていることを警告してくれたのも、同じ彼(＝綾部、筆者注)だった。その年の五月一三日、私たちは上海に向けて出港し、…(略)…六三年一〇月、上海からこちらに戻つたところ、私の忠実な生徒である綾部が昇進のために故郷に戻され、すぐには帰ってくるができそうにないことを知つた⁽³³⁾」とあるように、幸熙はフルベッキ一家に一時的な国外避難を勧めた。その後、フルベッキが長崎に帰つた九月までに、幸熙は藩から新たな役目を命じられ佐賀に戻つた。

(二) 長崎での情報活動

これまで見てきたことから、幸熙は藩から長崎での英学稽古を命じられ、本野の手引きでフルベッキと知り合つたと考えられる。長崎遊学を奇貨として兄村田の求めに従い、キリスト教について秘密裏にかつ熱心にフルベッキから学んだ姿が想像される。だが、開港地・長崎に、軍事研究を目的に派遣された藩士としての務めもあった。

幸熙は文久三年三月二八日付の「長崎諷説書」と題した情勢報告書を藩に提出している。この頃は先述のように、生麦事件によって日英間に戦争が始まるとさささやかれていた時期に当たる。佐賀藩としても、長崎が戦闘に巻き込まれるかどうか大きな関心を持たざるを得ない状況だった。

「長崎諷説書」には、「当節長崎表諷説聞取候廉々」として四項目、「市中雜説左之通」として三項目、長崎で収集した内外情勢が報告されている。

「当節長崎表諷説聞取候廉々」では、①「一 此度英国ミニエストル官（＝公使、筆者注）神奈川表渡来ニ付英人之趣意如何ニ候哉亞人フルベツキ相尋候処」として、英国は日本への要求事項が拒否された場合、成果なしに帰るわけにいかないが、さりとて断交する考えもなく、琉球を占領してその返還の代償として薩摩藩から賠償金を得るつもりだ、と英国公使が上海で米国公使に内々に話したそうだと報告している。

また、②英国公使が日本へ交渉に来たことを聞いた在上海公使が、驚いて三月中旬に神奈川へ来航し、英国人が粗雑なことをして戦争にでもなったら、自国はもちろん米國などの貿易商人も迷惑を被るので、ぜひとも和解させるつもりであると「仏蘭西コンシユル（＝領事、筆者注）申聞候」なども記している。

さらには、③「フルベツキ宅ニ而蘭人相話候」内容として、長崎奉行所が三月二四日に米・英ほか四カ国の領事呼び出し、「日本は英国を追い出すことも覚悟の上で事に当たっている」と述べ聞かせたが、その後、英国以外の領事に対しては、通詞を介して内々に「英国領事がいたので厳しいことを言ったが、英国以外の外国人を十分に守りきれないので平穩のうちに国外に退去した方がよい」と伝えた、と報じている。

このように幸熙は、フルベツキはもちろん、フルベツキ宅で会ったオラ

ンダ人やフランス領事からまで日英間の機密情報を聞き出し、藩へ報告している。そしてこれらの情報の内容は、かなり正確だった。⁽³⁵⁾

(三) プロテスタント受洗

長崎から佐賀に戻ってから三年後の慶応二年、幸熙は再び長崎に姿を現した。フルベツキの書簡は、その時のことを次のように記している。

「面談は五月一七日に設けられた。このときの訪問者は、家老つまり日藩の執政の一人である『若狭』と、彼の弟『綾部』であった。：（略）：若狭と綾部のほか、二〇歳と二四歳の若狭の若い二人の息子たち、四年間使者役を務めた家来の本野を居間に通した⁽³⁶⁾とある通り、幸熙は兄村田、その息子二人、本野の計五人でフルベツキを訪れた。「居間」は、長崎居留外国人の名前や居所を記した「寅（慶応二年）正月 外国人并支那人名前取調帳⁽³⁷⁾」に「大徳寺止宿 亞人 フルベツク」とあり、一二月の同種史料にも同内容の記載があることから、現長崎市西小島一丁目にあった大徳寺内の一室だったと考えられる。

フルベツキは「彼らは聖書に非常に精通しており、いくつか適切な引用もし、対話をしている間に私が何回か聖書の一節を口にすると、彼らは簡単にそれがどの一節かを理解」した、と記す。そして「帰ろうとしていると思ったまさにそのとき、若狭は私の不意を突いて、町から立ち去る前に彼と弟の綾部に洗礼を授けることを私が拒むかどうか聞いてきた」とあり、「たくさんの日本人がいろいろな時にキリスト教徒になることが、本当に言葉の通り非常に危険であると話していた」ため、大変に驚いたと記している。

フルベツキは、洗礼を受けることに迷信じみた意味を求めないことや、

受洗者が負う義務の重さを説き、村田と幸熙の覚悟を試した。それに対し二人は「洗礼を受けたいと繰り返し、秘密のうちにやられることだけを求めた。日本に情報が戻ってきて、彼らや家族の命を危険にさらすことがないよう、アメリカにも報告しないことを求め」、ついには五旬節（ペンテコステ）に当たる一八六六年五月二〇日（慶応二年四月六日）の日曜日午後七時に洗礼式をすることになった。村田五三歳、幸熙三三歳であった。

二人の洗礼は、本野と立会人のフルベッキ夫人列席のもと、テーブルに白い布を広げ、大きなカットグラスの果物皿を洗礼盤代わりにした、にわか仕立てで行われた。「私たちは英語と日本語両方でもに祈り、洗礼式用に間に合わせて形式を変えた礼拝式を続けて行い、聖式を行った後、祈禱と感謝の祈りで締めくくった」とある。

受洗の動機については、はっきりとした記述は見られない。それを推測させるものとして、フルベッキの以下の記述を挙げたい。

これら二人の武士がその悲惨な過去の生活の暗黒と罪の状態について告白したこと、また救い主を信じ得た平和、救い主を愛し、その救い主の贖罪の愛をうけた者として感ずる歓喜について彼等が告白したことを今ここに詳しくのべることはできません。ただわたしがとくに注意したいことは、日本人の回心と救いについて彼等が示した憂慮です。彼等は一度ならず日本国民の無知と道徳的墮落に対して、またこの国における迫害に対して、深い悲しみを言い表わしていたことで、また仏教が一般に行なわれているので、全国民をいつかは改宗させる神の力を疑いはしないけれども、仏教に対して、最後の勝利を得る目に見える方法がないことをなげいていました。…（略）…福音を

十分に受け容れることによって、日本と世界に來たらすべき靈的、道徳的、物質的な広大な利益について、大いに弁じていました。⁽³⁸⁾

以上、幸熙らの受洗の様子を細かく見たが、彼らが生きた幕末社会におけるキリスト教観がどのようなものであったのかについて、簡単に触れておきたい。

藤井貞文氏によると、鎖国下のキリスト教観は、邪教観と祖法観からなっていた。邪教観とは、日本の国を奪い取るために宣教師は布教するのだとか、宣教師は魔術を使うのだといった考えや迷信だ。祖法観とは、長らくキリスト教禁制が続いたために、禁教令は墨守すべき祖法であるとする意識である。⁽³⁹⁾

ところが、このような考えや意識は、一八世紀半ば以降、蘭学の発展とともに知識階層の間では徐々に弱まっていった。八耳俊文氏は、自然科学の輸入蘭書であっても、キリスト教的な自然観に基づいた記述が多く見られ、蘭学者が「科学とキリスト教の結びつきをいやが応でも意識したことは想像に難くない」と述べている。⁽⁴⁰⁾ また、小田信士氏は、本多利明や司馬江漢、渡辺崋山、横井小楠らを取り上げ、彼らの社会経済思想とキリスト教思想との接触の跡を丹念に拾い上げている。⁽⁴¹⁾

藤井氏によると、安政四年一二月、米国との通商条約締結を決意した幕府が、大名を呼んで貿易開始のやむなきを伝達する際、開国方針を貫徹するためとはいえ、「邪教之御氣遣ひは絶而無之」と述べ、キリスト教は邪教に非ずと達するまでに至った。⁽⁴²⁾

以上より、支配層を含む知識階層の間では、キリスト教を拒絶する姿勢はある程度、緩和されていたと思われる。

(四) 明治維新前後の動静

クリスチャンとなった幸熙は慶応四年、藩主鍋島直大の京都入りの際、「別段御供」を命じられ、北陸道を進んで出羽にまで出陣し、明治二年一月に佐賀に戻った⁽⁴³⁾。別段御供とは、戊辰戦争に出動した三つの大組とは別に侍・手明鐘・足軽の中から長男・次三男の区別なく強壯な者を選んで組織した、最新式のスペンサー後装銃を携帯した精鋭部隊であった⁽⁴⁴⁾。

藩内での役職は、

明治二年二月 陸軍所指南役備欠

六月 陸軍所砲術歩練⁽⁴⁵⁾試補

七月 測量学寮長試補を兼務

八月 二番大隊砲隊副司令

(月不明) 測量学寮長試補から算術小師範⁽⁴⁶⁾

一二月時点 砲術歩操試補兼算術小師範試補⁽⁴⁶⁾
と変遷した。

実戦部門としては二番大隊の砲隊副司令を務め、教育部門としては、教練関係では陸軍所指南役備欠や陸軍所砲術試補、歩操試補など、数学・測量学関係では測量学寮長試補や算術小師範(試補)を務めた。

目標点に砲弾を発射して敵を攻撃する砲術は、弾丸や装薬を節約して敵に損害を与える上で数学や物理学に基づいた射撃法が必要となる。目標点までの距離の測量、正確な弾着のための発射角度や速度の決定など、砲術と算術は切っても切れない関係にある⁽⁴⁷⁾。その両方を幸熙は身に付け、戊辰戦争で実戦に臨み、藩士への教育にも当たったのであろう。

同二日吉

一、綾部三左衛門殿、近々々算術為遊学、東京被差越候由二而、為御暇乞被罷出 御西御通被成、無間も御帰り相成候事⁽⁴⁸⁾

幸熙は明治三年七月二日、数学をさらに学ぶため上京を決意し、兄村田の佐賀屋敷を暇乞いに訪れた。この史料を載せる冊子の表紙には「日記御側」としかなく、所蔵する早稲田大学図書館は内容から佐賀藩の御側日記と名づけたとしているが、佐賀本藩ではなく村田の佐賀屋敷の日記とみて間違いない。随所に「若狭様」「龍吉郎様」という村田家当主と嫡子の名が出てきたり、「若狭様」が領地に赴く様子が記されたり、請求記号の親番号が同じ史料である「佐賀藩」士卒俸給渡方帳」に記されている人名が村田家家臣らと同一であることから、これらの史料は久保田(現佐賀市西部)を領した村田家の伝来史料が、恐らくは大隈重信との関係によって混入したものであろう⁽⁴⁹⁾。引用史料中の「御西」は、屋敷内の村田の居住区域を指しているのではないだろうか。

三七歳の幸熙は、こうして数学の勉強を志して上京し、明治三二年に亡くなるまで東京で暮らすことになるが、前年の二年八月、佐賀藩では地方知行が廃止され、全家臣への蔵米支給が行われ⁽⁵⁰⁾、綾部家は知行を蔵米六二・〇五石に減らされたばかりであった⁽⁵¹⁾。この頃幸熙は家督を継ぎ、養父幸教、養母トキ、妻キチ、養子幸保、娘キワ、同ヨネツル、養女サトや使用人を抱える家長として、生活の糧を得る必要に迫られていたであろう。

まとめ

佐賀藩では天保六年、財政再建を目指した藩政改革が藩主鍋島直正の主

導によりスタートし、儉約、人材登用、農政改革、殖産興業の推進などを柱に富国政策がとられた。他方、長崎警備を担った佐賀藩は、フェートン号事件を教訓に洋式工業を導入した軍備の近代化を強力に進めた。

こうした藩政改革開始の前年に生まれた幸熙の成長は、藩の富国強兵の道と歩みを一にしたものだった。九歳の時に十五御茶屋に蘭伝石火矢製造所ができ、一七歳で築地に洋式反射炉が築造されて大砲製造が始まった。一八歳の時には蘭学寮が設置されて藩の理化学研究が本格化し、二二歳の時には蘭学寮生らが長崎でオランダ人から海軍伝習を受けた。藩がオランダから軍艦電流丸を購入、三重津に海軍所ができたのは二五歳の時であった。こうした成育環境の中で、蘭癖の兄村田政矩から多大な影響を受けたことであろう。

藩校で取めた優秀な成績を見込まれ、二九歳で長崎での英学稽古を命じられた。フルベッキに英語や数学を学び、在留のオランダ人やフランス領事とも接触。西洋文明を目の当たりにし、深く傾倒していったに違いない。三三歳で洗礼を受けるに至った。後には藩内で数学・測量学と砲術・歩兵操練の専門家として軍事部門で実務に当たった。

キリスト教受洗の動機を巡っては、「悲惨な過去の生活の暗黒と罪の状態」を悔いたからとしか史料からは分からない。その言わんとするところははっきりしないが、彼らが「日本国民の無知と道德的墮落」を深く悲しみ、いつか全国民を改宗させて「靈的、道德的、物質的な利益」を得たいとも話したことに動機のヒントが隠されていないであろうか。

明治初期にプロテスタントの洗礼を受けた旧武士層について、メソジスト派牧師で青山学院第三代理事長を務めた平田平三は「個人の魂の救に属する靈的実験などと言ふよりも、文明的宗教とか、或は済民救国などと言

つた抽象的な観方から、信仰したる人も多かつた」と述べている。また、その頃は「偶像排斥、一夫一婦主義、禁酒禁煙、此三大条綱即基督教の如き感があつた」とも言われる。⁵⁵⁾

こうしたことから、西洋文明の「優秀さ」や一夫一婦制などのキリスト教的道德を知らぬ日本人を啓蒙し、いつかは国民全体を改宗させ物質的な利益までも日本にもたらしたいという「済民救国」的な意識が、村田と幸熙の中にもあつたのではないだろうか。

世界的な視野から幕末期のプロテスタント伝道活動を見た場合、阿部行蔵氏は、英国及び米国北東部の先進資本主義地域の教会によるものだったとしたうえで、「欧米先進諸国からの外圧と並行して、これと随伴して」展開したという「特殊な条件」を見落としてはならないと述べている。⁵⁶⁾ 外圧への様々な反応の一つとして、特に和魂洋才思想との関連において、いわば「洋魂洋才」の一例として幸熙らの受洗という行為の意味を捉えることも可能ではないかと考える。

一次史料としては扱えぬものだが、吉田清太郎という牧師が明治二七ごろ佐賀で、村田の孫から聞いた話として、村田が、拾得した聖書を研究すれば西欧の軍人の勇敢さが分かるかもしれないと考え、敢えて禁書を研究して藩主に提言すべきかどうかを幸熙に聞いたのに対し、幸熙が「有益であつたならばその時始めて建白すればよし、無効のものであつたなら放擲したらよからう」と述べたと記している。⁵⁷⁾ これは、聖書という「洋魂」を外圧から国を救うためのものとして捉えていたことを窺わせる興味深いエピソードである。

明治維新後の幸熙については、『植村正久と其の時代 一』に「其の綾部と云ふ人は後年東京に來り、数寄屋橋教会に加はつたさうである（註 綾

部がフルベッキ博士に贈った写真が、博士の遺族の許に保存されてある。⁽⁵⁸⁾」との短い記述があり、信仰を維持したことが分かる。今後、受洗後の歩みも含めて、彼と村田がキリスト教禁制下に敢えて受洗したことの意味をさらに追ってみたい。また、キリスト教徒の幸熙が「清岸院諦誓熙道白心居士」の法名を持って家の墓に埋葬されていることの意味（村田も瑞龍院大運西麒麟居士の法名で家の菩提寺に埋葬されている）や、多くの概説書に氏名を「綾部恭」と記されているのはなぜなのか、などについても今後の課題としたい。

注

- (1) 「幸熙」の読みは、後述の家系図などによっても不明である。ただ、*Who's who in Japan* (Shunjiro Kurita, 一九二二年) に掲載されている幸熙の娘サトの夫 Sata-kibara Shūzō (榊原昇造) の項に、サトの父親として「Kōki Ayabe」とあることから、明治維新後は日常的には「こうき」と名乗っていたものと考えられる。なお、村田政矩の名前の読み「ただのり」は、永松亨氏の御教示によって見た「代々記上」(鍋島家文庫〈複製本〉、佐賀県立図書館) 収載の村田家家譜に「タ、ノリ」と振られていることから明らかである。
- (2) 小沢三郎『幕末明治耶穌教史研究』(亜細亜書房、一九四四年〈日本キリスト教団出版局、二〇〇六年オンデマンド版〉)、同『日本プロテスタント史研究』(東海大学出版局、一九六四年)、小林功芳「研究ノート 矢野隆山の洗礼と死」(「朝日新聞」東京本社版一九八一年二月九日付夕刊)、今井幹夫「矢野隆山と4人の宣教師」(幕末における日本語学習の一断面) (『日本語教育』六〇、一九八六年)、前島潔「聖公会史料探訪記(其一) 第一受洗者は誰か」(庄村某氏の身許調査) (『基督教週報』七〇(一三三)〜同(其十二) 明治初期の信仰意識・庄村省三伝補遺) (同七〇(二四)) (いずれも一九三五年)、落合弘樹「密偵荘村省三と不平士族」(佐々木克編『それぞれの明治維新・変革期の生き方』吉川弘文館、二〇〇〇年)、大日方純夫『維新政府の密偵たち』(歴史文化ライブラリー三六八、吉川弘文館、二〇一三年)、杉井六郎『公会名簿』に見える鈴木貫一について」(初期教会形成期の人びとの個別研究) (『キリスト教社会問題研究』二〇、一九七二年) など。
- (3) 多数あるがごく一部を挙げると、佐波巨編著『植村正久と其の時代 一』(教文館、一九三七年〈一九六六年復刻版〉)、海老沢亮『日本キリスト教百年史』(日本基督教団出版部、一九六五年三版) など。
- (4) 村瀬寿代「長崎におけるフルベッキの人脈」(『桃山学院大学キリスト教論集』三六、二〇〇〇年)、村瀬寿代訳編・W・E・グリフィス『日本のフルベッキ』(洋学堂書店、二〇〇三年〈*Verbeck of Japan, 1800*の日本語訳〉)、村瀬寿代「フルベッキ研究の新たな可能性」(『桃山学院大学キリスト教論集』三七、二〇〇一年)。佐々木晃「長崎のフルベッキ(一八五九〜一八六九)」(『明治学院大学キリスト教研究所紀要』三五、二〇〇二年)。古田栄作「G・ヴァーベック論(一)」(『大手前女子大学論集』二〇、一九八六年)。
- (5) 古くは沖野岩三『日本基督新教縦断面』(警醒社書店・和田弘栄堂、一九二〇年〈近代日本キリスト教名著選集第三期(キリスト教受容史篇) 二〇』日本図書センター、二〇〇三年復刊)。他には『早稲田大学百年史 第一巻』(早稲田大学出版部、一九七八年) 九五頁、『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、一九八八年) 一三八八頁、塩野和夫訳・解説『禁教国日本の報道』(『ヘラルド』誌(1825-1873)より) (雄松堂出版、二〇〇七年) 二二三頁ほか、伊藤典子『フルベッキ、志の生涯』(教師として宣教師として) (あゆむ出版、二〇一〇年) 八一頁ほか、O・ケリー著・江尻弘訳『日本プロテスタント宣教史』(最初の五〇年(1859-1909)) (教文館、二〇一〇年) 八五頁ほか。
- (6) 以下、「御家老系図・深堀家系」(鍋島家文書〈複製本〉、佐賀県立図書館)、「深堀鍋島家系図 明治三二年写」(長崎歴史文化博物館) による。
- (7) 「綾部文書〈影写本〉」(東京大学史料編纂所)。
- (8) 「大小配分石高帳」(嘉永六年、鍋島家文庫〈複製本〉、佐賀県立図書館)。
- (9) 「旧佐賀県士族緑高調帳(佐賀県稿本)」(元佐賀県緑制変革・有禄士族平民人名・旧佐賀藩改正禄高一人別帳) 二(長崎県史料二十八、国立公文書館)の記載とも一致する。なおこの史料は作成年不明だが、明治二年の佐賀藩緑制改正時の頃のものであろう。
- (10) 高野信治「幕末期における佐賀藩家臣団の構造」(九州文化史研究所紀要) 三一、一九八六年) 三五頁の表から。
- (11) 「系図(アの部)」(鍋島家文庫〈複製本〉、佐賀県立図書館)。

- (12) 高野和人『肥前鍋島家分限帳』（青潮社、一九九四年）。
- (13) 以下、古田栄作「致遠館の周辺」(「大手前女子大学論集」一九、一九八五年) 一九八—二〇一頁、生馬寛信「第五章 維新前後・佐賀藩の学校改革」(幕末維新学校研究会編『幕末維新期における「学校」の組織化』、多賀出版、一九九六年) 三四六頁、生馬寛信・中野正裕「安政年間の佐賀藩士・藩士名簿『早引』、『石高帳』にみる」(「佐賀大学文化教育学部研究論文集」一四(一)、二〇〇九年) による。
- (14) 「早引 安政五年十二月改」(鍋島家文庫〈複製本〉、佐賀県立図書館)。
- (15) 以上は前出「安政年間の佐賀藩士」の解題による。
- (16) 「地方教育史研究」二八、二〇〇七年、二八・二九頁。
- (17) 幸熙が長崎に赴いたことに触れている書籍・論文はほとんどすべてと言ってよいが、挙例すれば前出『日本キリスト教百年史』や前出「長崎におけるフルベッキの人脈」など。
- (18) 「請御意下 文久二年戊正月より同年十二月迄 御備立方」(鍋島家文庫〈マイクロフィルム〉、佐賀県立図書館)。以下、「請御意」または「御意請」はすべて鍋島家文庫。
- (19) 前出「安政年間の佐賀藩士」掲載の藩士名簿によると、嶋内藤吉は切米三五石・形左衛門の嫡子で一九歳。
- (20) 以下、『佐賀県教育史 四』(佐賀県教育委員会、一九九一年)二九三・二九四頁による。なお、多久島澄子「幕末佐賀藩の英学のはじまりと進展」石丸虎五郎・本野周蔵・峯源次郎を通して」(「佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要」四、二〇〇九年)は、安政六年に秀島と石丸が長崎で和蘭通詞に学んだのが、佐賀藩士の英学学習の始まりとしている。
- (21) 中村孝也『中牟田倉之助伝』(中牟田武信、一九一九年)。
- (22) 春名徹「中牟田倉之助の上海体験」(「国学院大学紀要」三五、一九九七年)。
- (23) The First Baptism of Converts in Japan (by The Rev. G. F. Verbeck, D. D.) (A Manual of the Missions of the Reformed Dutch Church in America, New York, Board of publication of the Reformed Church in America, 1877) 三〇一・三〇二頁(筆者訳)。A Manual of…は、米国オランダ改革派教会の伝道組織が海外布教用につくった手引類とみられる。The First Baptism of Converts in Japanと題した一章は、Verbeck著と書かれてゐるほか、一四行の短い導入部に続いて「Dr. Verbeck's narrative begins.」と記された後に、「I」(私は)で語られる長い本文部分が続くことから、フルベッキが送った書簡を転載したものと考えて間違いない。なお、翻訳に当たっては赤川学氏(東京大学文学部)に協力していただいた。
- (24) 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』(新教出版社、一九七八年(二〇〇七年オンデマンド版) 六六―七二頁)。
- (25) 本野盛亨、一八三六―一九〇九年。村田政矩の家臣で、村田の援助で緒方洪庵の適塾などで学ぶ。明治政府では横浜税関長などを務めた。読売新聞創設者の一人で後に社長。
- (26) 本野亨編『苦学時代の本野盛亨翁』(本野亨、一九三五年) 三三頁。
- (27) 前出「中牟田倉之助伝」一九八頁。
- (28) 長崎市役所編『長崎叢書 下』(長崎市、一九二六年)『明治百年史叢書』原書房、一九七三年複製) 三二六頁。
- (29) 前出「長崎におけるフルベッキの人脈」六八頁。注(4)に記した他の論文も参照。
- (30) 前出『苦学時代の本野盛亨翁』三八頁。
- (31) アンドリュウ・コビンク「幕末佐賀藩の対外関係の研究」海外経験による情報導入を中心に」(鍋島報効会、一九九四年) 一九一頁注一二。
- (32) 前出「フルベッキ書簡集」一三一頁。
- (33) 前出「The First Baptism of Converts in Japan」三〇二頁。一八六三年五月一三日は旧暦の文久三年三月二六日、同一〇月は同九月。
- (34) 綾部三左衛門「長崎諷説書」(佐賀藩御任組所編「内密書附并開合書」、鍋島家文庫〈マイクロフィルム〉、佐賀県立図書館)。
- (35) 伊藤昭弘「文久三年の佐賀藩」(「佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要」二、二〇〇八年) 二二頁。同論文は、前出「内密書附并開合書」を使って、幕府が設定した文久三年五月の「攘夷期限」前後の佐賀藩の動向を分析しており、その中で「綾部三左衛門(役職など不明)」として「長崎諷説書」の考察もしている。
- (36) 前出「The First Baptism of Converts in Japan」三〇五頁(以下、特に断らない限り同史料からの引用)。
- (37) 長崎県立長崎図書館郷土史料叢書一『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿 一』(長崎県立長崎図書館、二〇〇三年)。
- (38) 前出「フルベッキ書簡集」一〇二頁。
- (39) 藤井貞文『開国期基督教の研究』(国書刊行会、一九八六年) 一九六頁以降。

- (40) 八耳俊文「キリスト教と科学の大衆化…蘭学の背景」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』七、一九九九年) 主に六四・六五頁。
- (41) 小田信士『幕末キリスト教経済思想史』(教文館、一九八二年)。
- (42) 前出『開国期基督教の研究』二二一・二二二頁。
- (43) 前出「藤原姓綾部氏系図」の幸熙項及び慶応三年「請御意」。
- (44) 木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』(九州大学出版会、一九九七年) 三九一頁。
- (45) 以上、明治二年「御意請」。
- (46) 秀島成忠編『佐賀藩海軍史』(知新会、一九一七年) 二四二頁。「凌部三左衛門」と記されているが、「綾部三左衛門」の誤植であろう。
- (47) 以上、吉田忠「池部啓太の弾道学」(『日本文化研究所報告』二〇、一九八四年) 特に七七頁。
- (48) 「佐賀藩御側日記」…明治二年巳九月ヨリ午ノ八月迄」(早稲田大学図書館ホームページ「古典籍総合データベース」)。日付の「同日」とは「明治三年七月二日」。
- (49) 前出「古典籍総合データベース」における当該史料の「内容等」の説明。
- (50) 『久保田町史 上巻』(久保田町、二〇〇二年) 三四七頁。
- (51) 大隈侯八十五年史編纂会編『大隈侯八十五年史 一』(同編纂会、一九二六年) 九二頁に、大隈は「蘭癖家の名ある家老村田若狭に愛せられてその家に入入し、若狭の話によつて、新知識を得たことがあつたらしい。(略)時によると、若狭の家に三日も留つて遊んでゐた事があつた」という記述がある。
- (52) 木原溥幸『佐賀藩と明治維新』(九州大学出版会、二〇〇九年) 一〇八〜一一〇頁。
- (53) 前出「旧佐賀県士族禄高調帳二」。
- (54) 田中亀之助『平田平三伝』(基督教出版社、一九三八年)《伝記叢書 二二六》大空社、一九九六年復刊) 五〇頁。
- (55) 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』(新教出版社、一九六一年) 一八頁。
- (56) 阿部行蔵「幕末における『耶穌教』の伝来」(東京都立大学「人文学報」一七、一九五八年) 二頁。
- (57) 吉田清太郎『活ける宗教と人生』(雄山閣、一九三四年) 四九・五〇頁。村田の孫というのは、同志社に学んだキリスト教徒、虎吉郎のことであろう。
- (58) 前出、三七八頁。

《参考文献》

藤野保編『佐賀藩の総合研究』(吉川弘文館、一九八二年)、同『続佐賀藩の総合研究』

(吉川弘文館、一九八七年)
藤野保『佐賀藩』(吉川弘文館、二〇一〇年)

(幕末佐賀研究会)